



今度こそ、

どんな診療が俺を

待っているのか

相馬 昂

第一幕	神々しき男体——狩人の視線.....	4
第二幕	診察台の供物——振じれゆく愛と欲.....	21
第三幕	蕩ける胸と、屈辱の涙.....	38
第四幕	淫靡なるナルキッソス——触れたい、触れられたい.....	93
第五幕	男唇の失守——この男は、まだ何も知らない.....	137
第六幕	攻め落とされた男臀——俺の尻で存分に遊ぼう.....	197
第七幕	蒙眼の献身と、耐えがたい屈辱.....	269
第八幕	淫らな本能——落ちる獲物、最後の足掻き.....	333
第九幕	墜ちるアポロン、汚される神体.....	392
第十幕	雄の匂い——夏の川、男の川.....	453
第十一幕	影と光の狭間で——争って俺を喰らう二人.....	499
第十二幕	聖夜の淫罪——神器よ、一斉に俺を貫け.....	578
第十三幕	肉欲の決断——交わらない道、交わった身体.....	634

第一幕 神々しき男体——狩人の視線

「痛みはここですね」

真っ白な診療室に、静かに響く低い声。

診療台の上、男の肉体が無防備に横たわっている。

まるで大理石の彫像——いや、それ以上に官能的な造形。

その均整の取れた体躯、布越しにさえ圧倒的な存在感を放っていた。

わずかに肌の色を滲ませ、男の肉体の熱を透かしているように見えた。

抑え込まれた強靱な筋肉が、静かに蠢きながら、その束縛を今にも押し破らんとする。

広い肩幅から滑らかに繋がる重厚な胸板は、衣服越しでもその隆起が明確で、生地を押し上げんばかりにせり出している。

鍛え上げられた大胸筋が生む陰影は深く、中央を走る谷間は、険しい山脈の稜線のように浮かび上がっていた。

わずかな隔たりさえものともせず伝わる弾力。

呼吸のたびに微かに震え、強固な鎧のように張り詰めている。

そして、頂点——

そこには、ほんのわずかに布の動きを伝える小さな突起があった。

まるで、ぷるんと弾む果汁たっぷりのゼリーの上にちょこんと乗せられた二粒のチェリー。

弾力に富んだその膨らみは、薄布越しにも存在を主張し、指を滑らせれば、ふわりと押し返してくる心地よい弾性すら感じられそうだった。

.....この胸に指を這わせたなら、どうなるのか？

久住司は唇を舐めた。その甘さを確かめるように。

引き締まった腹部は、無駄な一片すらない、鋭利な曲線を描いていた。

腹筋の中央を貫く一本の深い溝は、まるで肉体の軸そのものを示すように、真っ直ぐに伸びている。

光を受けるたびに、その存在はより鮮明になり――さて、指を這わせたなら、触感はベルベッ

トのようにしなやかで滑らかなのか、それとも
鍛え抜かれた鋼のように密度のある硬さを秘め
ているのか？

そして、その下。

——なんという荘厳な巨柱だ。

視界が、それだけで満ちる。この空間に、もは
やそれ以外のものなど入り込む余地はない。

骨格に沿って張り出す大腿四頭筋は、岩盤のよ
うに硬く、それでいて内には原始の獣性を孕ん
でいる。

根を張る古木のような圧倒的な安定感。それは
何ものにも揺るがぬ強さ。

——だが、この脚は、本当に揺るがぬものなの
か？

指先を這わせたら？

わずかに熱を孕み、快楽の波打つように痙攣し

——やがて、耐えきれずに震え続けるのか？

——だが、その間にこそ、最も視線を奪う存在
があった。

脚の付け根、布地の下に堂々と鎮座する突起。

逃れようもなく、目に飛び込んでくる。

それは、生まれ持った覇権を示すかのように、
衣服すら意に介さず、ただそこに君臨してい
た。

誇り高く、隠すことを知らぬ圧倒的な雄の証。

その輪郭は、傲慢なまでに己の存在を誇示し、
理性を焼き尽くすほど求めずにはいられない衝
動と、近づくことすら許されぬ畏れを同時に抱
かせる。

同時に、抗うことなど許さぬ支配の象徴でも
あった。

——だが、そんな圧倒的な雄が、やがては押さえつけられ、征服される運命を辿ることになるなど、果たして己は想像しただろうか？

布の下で燻る獣が、今にもその檻を引き裂き、解き放たれようとしているかのように——。

.....この布を取り払えば、一体何が姿を現すのか。

そんな考えが、脳裏を掠める。

久住司は手袋をはめ、口元に指を添えながら、唇の端に満足げな笑みを浮かべ、まるで宝石を弄ぶように、相馬昂の顔を覗き込んだ。

精悍な顔立ち。

鋭く隆起した頬骨が、硬質な輪郭を形作る。

……と、その時、久住の視線がふと止まった。

滑らかな肌に、微かに刻まれた細い線。

首の横、僅かに赤みを帯びた指の痕——爪で掠められたような、それは浅い傷だった。

まるで、悪魔がこの完璧な肉体に走らせた、ひと筋の裂け目。

淡く、消えかけたその傷が、静かに語っている。

前夜、この男が誰かに抱かれたことを。

誰かの指が、ここを這ったことを。

久住の指が、手袋越しにぐっと握り込まれる。

不愉快だった。

喉の奥が、じりじりと焼けるような感覚に満たされる。

舌先で歯を押しながら、小さく息を吐いた。

(.....もう二度と、こんな痕がつくことはない。)

そして、視線を動かす。

がっしりとした顎は分厚い胸板と釣り合い、無造作に剃られた剃り跡がかすかに残る。

まったく、不器用な男だ。

それなのに――なぜ、このまばらに残る青い影は、こんなにも指先を這わせたくさせるのか。

太く整った眉は、意志の強さを映しながらも、端正な形がどこか気品すら漂わせる。

その下の瞳は、今は閉じられ、静寂に包まれていた。

何も映さず、ただ穏やかに安らいでいる。

眠る獅子のように。

その身体には、計り知れないほどの力が宿っているはずなのに——

だが、いずれは俺の手の中で眠る、小さな猫になるのだろうか？

そして、何よりも久住の目を引いたのは——。

無防備に開いた、あの唇。

男らしい顔の中に、ほんの一筋の弱さが滲むように。

決して誰にも屈しないはずの戦士が、一瞬だけ見せる油断。

強固な鎧の隙間から覗く、致命的な弱点。

大きく開かれた唇が、わずかに震えながら、空気を孕むようにわななく。

何か巨大なものを受け入れる運命を背負わされているかのように――。

渴きかけた唇は、それでもなお、わずかに艶めき、紅を帯びている。

乾ききった大地に咲き誇る薔薇。

荒涼の中に咲く、その一輪の花は、ひどく脆く、ひどく妖艶だった。

舌先で濡らした跡が、かすかに残る。

——まるで、俺がそれを潤すことを、待っているかのように。

無意識の誘惑か、それとも本能的な警戒か。

あるいは、触れられることを予感して、怯えているのか。

どちらにせよ。

この隙は、あまりにも、危うい。

もし、今、そこへ指を滑らせたら――。

ゆっくりとなぞり、その熱を確かめたならば
――。

どんな反応を見せるのか。

この男は、どんな顔をするのだろうか。

気づけば、久住司の指先が動きかけていた。

しかし、その瞬間――

「……っ」

相馬昂の喉が、ごくりと鳴った。

張り詰めた首筋を駆け上る、確かな脈動。

その僅かな動きひとつで、すべてがかき消された。

この男は、やはり獣だ。

.....決して、触れてはならないはずなのに。

久住は目を細め、指を静かに引いた。

しかし、微笑みだけは消さなかった。

この喉を、いつか俺の指で震わせる日が来る、
と。

(.....今はまだ、待とう。)

静かに手を持ち上げ、手袋を整える。

指を曲げ伸ばし、きつく締め直す。

戦場に立つ前の将が、自らの武具を調えるかの
ように。

そして、ふっと一息つく。

視線は獲物を逃がさぬまま――。

「さて」

――本当の診療は、これからだ。

第二幕 診察台の供物——掬じれゆく 愛と欲

人は、美しいものを目にしたとき——その手に
収めたくなるものだ。

それは理屈ではなく、抗いようのない欲求。

そして今、その欲求が静かに、だが確実に、胸
の奥からせり上がってくるのを——久住司は止
められなかった。

診療台の上——。

横たわる男の肉体は、あまりにも完璧すぎた。

まるで、神々への生贄。

その肉体は、何もかもが整いすぎている。

無駄なものは一切削ぎ落とされ、ただ純粹な
「強さ」だけが宿る身体。

それは、手を伸ばすことすら躊躇わせるほど
に、美しく――

なのに、なぜか、この手で汚したくなる。

(.....こんなものが、この世に存在していいの
か?)

それは、脳内を奔る、あまりにも禍々しい想像
だった。

あまりに鮮烈すぎて、焼き付いて離れない。

(.....今、俺は何を考えた?)

目の前の男は、患者であり、対等な男。

そして、この場の支配者——本来ならば。

だが——

俺の内なる炎は、神々の聖域すら侵し始めている。

——そう、診療室のドアが開いたその瞬間から。

太陽神アポロンが降臨したかのような、清らかで神聖な輝き。

穢れを拭い去るほどの烈火と、溢れる生命の煌めき。

そう思ったのは、一瞬だった。

だが、次に目に入ったのは——眉をひそめ、頬を押さえる男の姿。

強者としての風格も、圧倒的な存在感も、すべてを纏っているはずの男が。

傷ついた小さな兎のように、眉を寄せ、痛みに耐えていた

そして、あの眼差し。

救いを求めるような、必死の乞い。

「……お願いします、先生。」

その声音は低く、けれどどこか弱々しかった。

その一言が、久住の中で何かを弾けさせる。

——これは、いい。

「診察台に上がれ。」

久住が、初めて命令を下した。

そして、次の瞬間。

相馬昂は、迷うことなく飛び乗った。

命令を待っていたかのように。

従順な子供のように——。

だが、跳躍したその一瞬――

それは、久住がたとえ幾度生まれ変わろうとも、決して忘れることのない「動」の美だった。

大きな体が、一片の迷いもなく、無駄なく、しなやかに弾む。

重力すら味方につけ、空気を切り裂くような滑らかさで、診察台の上へと舞う。

着地する瞬間、診察台が、わずかに揺れる。

無邪気な若獣が戯れるように。

本能が生んだ、一瞬の遊びがある。

それでさえ、力強さと精密さを余すところなく
示し、抑えきれない躍動感が滲む。

久住は、息を止めた。

(.....美しい。)

その瞬間、確信した。

(俺が、この男を支配できる。)

この隙のない男が、俺の言葉ひとつで、こうも
素直に従うのか？

この完璧な肉体が、俺の指示ひとつで動くの
か？

——こんな感覚は、初めてだった。

だが、気づいてしまった。

「強者を支配する快感。」

「支配が許されると悟った瞬間の、甘美な陶酔。」

久住は、初めて、自分の中で何かが目覚めるのを感じた。

——この美しさが、どこまで俺に染まるのか。

久住の目には、そこが決定的な隙に映った。

あの双丘。

膨らむたび、猛獣が静かに息を整えているように見えた。

そこにあるのは、ただの肉の塊ではない。

まるで、淫らに誘う鼓動。

鼓動に合わせて、ふわりと波打つ柔らかな影。

それは、揺らめく灯火のように、ゆっくりと揺れ、時折、微かに震え――。

熟れすぎた果実。

ただそこにあるだけで、罪深い。

指先が触れる瞬間を、今か、今かと待つように
――。

その皮を破る瞬間を、ただひたすらに。

それは、禁忌の実。

「.....お願いします、先生。」

――遠く、微かに、記憶の中でこだまする声。

久住の脳裏に、あの言葉が蘇る。

お前は、俺に何を求めている？

(.....この場所に、指を這わせたら)

(.....この膨らみを、掌で包み込んだら)

それを求めているのか？

「.....お願いします、先生。」

その声が、離れない。

脳の奥に、焼き付いた呪詛のように。

まるで、相馬昂という男が全身で囁いているように。

ゆるやかに波打つ双丘。

ゆっくりと持ち上がり、沈む。

「.....お願いします。」

——甘く、熱を含み、揺れる。

「先生。」

——脈を打つ。

息をするたびに、肉体が語る。

この男の身体が、俺に懇願している。

「触れてくれ」と。

噛みついた瞬間、二度と後戻りできないと知り

ながらも、手を伸ばさずにはいられない。

久住の喉が、僅かに動いた。

たかが、呼吸。

それだけで、ここまで蠱惑的な印象を与えるなど、ありえない。

——しかし、相馬昴という男は、そういう存在だった。

この肌に触れたら、何かが崩れ、何かが生まれる。

相馬昴。

まるで、戦場を駆け抜けてきた戦士。

幾度の闘争を刻んだ顔。

痛みと勝利を知る肉体。

——なのに。

診療台に横たわった瞬間——

彼の顔に、ふっと笑みが浮かんだ。

それは、わずかに力の抜けた、安堵の色を帯びた微笑。

長く苦しんだ痛みから、ようやく解放される。

そんな期待と、小さな安らぎが滲んでいた。

その笑顔は、あまりにも無垢で、まっすぐで。

無防備で、ひどく純粹で。

傷ひとつ知らぬ子供のように――。

その笑顔が、久住の胸を灼く。

なぜ、その顔を俺に向ける？

なぜ、そんな顔で俺を惑わせる？

(この白に、俺の色を落としたら――。)

この男は、本来なら支配する側の人間。

生まれながらに頂点に立つ男。

――だからこそ。

壊れないほど強いものほど、跪かせたくなる。

支配者ほど、支配される姿を見たくなる。

清らかなもののほど、深く穢したくなる。

本能が、そう囁く。

この男の背筋を丸めさせ、

その腕を掴み、握り返す余裕すら奪ったなら

――

どんな顔を見せる？

――怯えるのか。

――抗うのか。

――それとも、受け入れるのか。

どれであろうと、久住にとっては甘美な誘惑。

(.....あの腕を、この手で絡め取る日が来るとし
たら――)

――まだ、その時ではない。

ぞくり、と背筋を這う快感。

欲望が、少しずつ形を成していく。

ゆっくりと、確信に変わる。

一度狙った獲物は、決して逃がさない。

――この男は、俺のものになる。

第三幕 蕩ける胸と、屈辱の涙

(俺は……一体、何をやってるんだ?)

診療室の扉をくぐった瞬間、相馬昂は自分に問いかけた。

——なんで……またここに来たんだ?

虫歯のせいだ。治療が必要だから。それだけだ。

……それ以外に、理由なんてない。

……あるはずがない。

彼は、ジムで最強の男だった。

鍛え上げた肉体は、努力の証であり、己の誇り
そのもの。

その筋肉は、顧客の信頼を集め、周囲の者に畏
怖を抱かせる。

力を持つ者が、すべてを支配する。

それが、彼の世界の在り方だった。

——だからこそ、痛みを放置するわけにはいか
ない。

……いや、違う。

彼は、自分の肉体には絶対的な自信を持ってい
たが、実は——痛みには、極端に弱い。

打撲も、捻挫も、鋭い痛みも。

だが、それらは筋肉の痛みだ。

歯の痛みは違う。

小さな疼きが、じわじわと神経を蝕む。

それが耐えられなかった。

だから、あの日——即座に予約を入れ、すぐに
治療を受けた。

それだけのことだった。

——それだけ、のはずだったのに。

診察が終わってから、何かがおかしい。

あの指の感触が.....まだ、皮膚にまとわりついている。

いや、違和感だけじゃない。

唇の端に、あの指の感触が.....まだ、こびりついている。

胸の奥が、なぜかざわつく。

何が原因だ？

.....考えたくもない。

しかし——思い出してしまう。

あの時、俺は.....

——初めて、何もかもを他人に委ねた。

いつもなら、俺が掌握する側だ。

俺が命じ、相手が従う。

俺が望めば、相手はそれに応える。

それが、当然だった。

だが、あの時——俺は、ただ口を開け、歯科医
の手にすべてを任せた。

力を抜き、

ただ静かに、

流れに身を預け、導かれるままに——。

——それなのに。

俺は……あの感触を、嫌だと思わなかった。

むしろ……

どこか、心地よくさえ、感じていた。

考えることをやめ、ただ、されるがままに。

それは——

微妙だ。

でも、悪くない。

(こんな感じなのか……他人に、託すって?)

——こんな感覚、知らなかった。

理解できない。

なのに、心のどこかで.....

ゆるやかに流れる雲が、澄んだ月を覆い隠して
いく。

淡い光が揺らぎ、夜の影が静かに広がる。

朧げな月明かりの下、そよ風が頬をかすめた。

それは、まるで——

あの指のように。

ずっと、俺の唇をなぞっていた。

.....これは、本当に必要な行為だったのか？

いや、違う。

違うはずだ。

だが、俺は——

あの時、拒むことすらしなかった。

.....いや、拒みたくなかったのかもしれない。

——痛みに怯える小さな子供を宥めるように。

.....そんなわけがない。

じゃない？

目を閉じる。

それなのに、

闇が、淡く滲み、

夜明けのように、ぼんやりと何かが浮かび上がる。

遠くで、くすぐるような笑い声がした。

軽く、弾むような声。

遠くて、近い。

懐かしいような、知らないような。

それは——陽だまりのように暖かく、何の陰りもない。

.....なのに。

この声を、知っている？

知っているはずなのに。

首筋に、何かが触れる。

温かく、柔らかい感触。

誰かの腕が、俺を包み込んでいる。

見ようとする。

振り返ろうとする。

だが――

視界が霞む。

焦点が合わない。

何度も、何度も――

見ようとしても、どうしても、

その顔だけが、ぼやけてしまう。

だけど、その人は――

ゆっくりと、唇を撫でた。

――確かめるように、

形をなぞるように、指先が何度も動いた。

息が触れそうな距離で、微かに、笑う気配がする。
る。

いつの間にか、現実と記憶が、溶け合っていた。

静かな診察室の中で、先生の指が、俺の唇を撫でる。

なぞるように、確かめるように。

拒まれることを想定しているのに、

.....けれど、俺は。

何も言えなかった。

.....気づけば、俺は二度目の予約を入れていた。

理由は……？

……わからない。

「では、口を開けてください」

低く、落ち着いた声が、耳元に触れる。

相馬は、言われるがままに口を開いた。

それが、すぐに後悔へと変わるとは知らずに
――。

指が触れた瞬間、喉がひくりと跳ねた。

(……っ、また……これか……)

だが——何かが違う。

前とは違う。

戸惑う間もなく、濡れた感触が舌の上を這う。

(.....これは.....?)

湿った指先が、ゆっくりと口内を撫でる。

舌の付け根を掠め、頬の内側をなぞるように動いた。

くすぐったいような、不快なような.....だが、

前ほどの嫌悪感はない。

——なのに。

喉の奥が、かすかに熱を持ち始める。

違和感に眉を寄せながら、無意識に舌を引く。

しかし、その瞬間――

頬の内側をなぞる指が、ゆっくりと舌へ戻り、
じわりと絡みつく。

拳を握りしめる。

呼吸が浅くなるのを感じる。

(.....何だ、これは.....)

心臓の鼓動が、微かに跳ねた。

焦りとも苛立ちともつかない感情が胸の奥に広がる。

必死に押し殺そうとするのに――

どこかで、指の動きを待ってしまっている自分に気づいた。

指が、頬の内側をなぞりながら、ゆっくりと滑っていく。

歯列を辿り、歯茎を押すように撫でる。

上顎を抉るように掠め、ゆっくりと舌の上へ戻る。

(.....ッ、やめろ.....！)

胸が大きく上下し、荒い息が漏れる。

抑えようとしても、呼吸が乱れるのを止められない。

いつもなら、ここで止まるはずだった。

だが——止まらない。

指は、そのまま、ゆっくりと口内を広げるように押し込まれた。

奥へ、奥へ。

舌の上を這い、喉の奥へと進んでいく。

(……っ、まで……！)

違う。

何かが.....違う.....？

舌の裏側をなぞりながら、指先が蠢く。

粘膜が擦られる感触に、肩が震える。

拒絶しなければならないのに、なぜか、喉が鳴る。

「.....っ」

唾液が絡み、微かな水音が響く。

指がゆっくりと唇の内側をなぞった。

柔らかな粘膜の上を、ゆっくりと、弄ぶように
這う。

「.....ッ」

熱が、ゆっくりと広がる。

肌が粟立つ。

歯を食いしばる。

手が、診療台の縁を強く掴む。

(.....なぜ.....止めない.....?)

こいつは.....なぜ.....?

なぜ、俺に.....?

こんなこと、許すわけがないのに——

なぜ、俺、止めない.....？

身体が震える。

まずい。

このままでは——

腰が、かすかに揺れそうになる。

身体が、指の動きに合わせて舞いそうになる。

(.....ッ、ダメだ.....！)

「.....やめろ.....！」

相馬は、咄嗟に声を振り絞り、久住の手を乱暴に振り払う。

——しかし、その一瞬。

指の存在が消え、消えた指先を、思わず探しそうになった——だが。

診療台から起き上がろうとする。

——その瞬間だった。

鋭い視線が絡みつく。

次の刹那、肩を掴まれた。

「っ——」

強引なだけではない。

迷いのない、鋭く的確な力。

——速い。

動く間もなく、鋭い力が肩を押さえつけた。

乱れた息が、一瞬止まった。

「……っ！」

目の前に広がるのは、久住の顔。

氷のような視線が、まっすぐ射抜く。

「不快か」

そう言わんばかりの、静かな瞳。

相馬は思わず、まぶたを強く閉じた。

——強い。

違う、そんなはずはない。

本気で振り払えば、簡単に抜け出せるはずだ。

なのに、指一本動かせなかった。

「……ッ」

強いのは、力ではない。

気圧されている。

俺は、なぜ……？

なぜ、こんなものに、怯んでいる？

あいつの力など、俺の前では何の意味も持たないはずだ。

——それなのに。

確かに、あの瞬間、身体が竦んでいた。

「……っ」

相馬は、強く瞼を押し閉ざした。

見えなければ、何も起こっていないのと同じだ。

そう思い込むように、さらに力を込める。

息が近い。

相馬は、荒くなった自分の呼吸を悟られまいと
歯を食いしばる。

久住の吐息が、皮膚を炙るように。

熱い。——なのに、身体の奥からじんわりと力
が抜けていく。

(.....くそ、なんだこの感覚.....)

「診療中だ。大人しくしろ。」

穏やかだが、静かな威厳があった。

——その声に、相馬は顔を横へ逸らした。

なぜか「逆らえない」と思わせる何かがあった。

気づけば、相馬は動きを止めていた。

それを見て、久住の指がゆるやかに動く。

押さえていた肩を、揉み解すように指先で捏ねる。

硬く張った筋肉をゆっくりとほぐしながら、滑るように腕へと移動する。

手のひらで、腕の筋をなぞる。

皮膚の下に浮かぶ硬質な張りを、掌がじつくりと味わうように辿る。

そして、再び肩へと戻り――

そのまま、鎖骨の上に指を沿わせながら、ゆっくりと胸元へと降りていった。

辿り着いた瞬間――二人の呼吸が揃って止まる。

(.....悪くないな。)

指先に伝わる感触が、確かなものとなる。

久住の手が――ピタリと止まる。

空を裂いた刃が、突如として静止したかのように。

だが、それはほんの一瞬のこと。

すぐに久住の身体が前へと傾く。

指先に宿る興奮を追い求めるように。

いや——全ての力を、その手に注ぎ込もうとするかのように。

一方、相馬の胸元にも、これまでにない感触がのしかかる。

心臓が指の感触に合わせるように脈を打つ。

撫でられるたび、強く収縮し、血が胸筋へと押し寄せるのを感じる。

触れられるたびに膨らんでいく。……いや、それは錯覚のはずだ。

普段よりも硬く、胸筋が、自分のものでないような感覚さえ覚える。

こんな感覚は——生まれて初めてだった。

(……これが、胸に触れられる感覚……?)

予想よりもずっと——

いや、想像したこともないほど、妙に意識を攫って離さない。

じわじわと熱が染み込んでいく。骨の奥まで溶かされそうな——そんな錯覚。

久住の指が、相馬の胸筋の輪郭をなぞるように
動く。

掴もうと、五指を広げる。

だが——指が回りきらない。

喉の奥で、低く息を吐く。

(.....大きいな。)

仕方なく、手のひらを滑らせる。

寸分も、寸分も——漏らさぬように。

僅かずつ、僅かずつ、掌全体を使って、貪るよ
うに撫でていく。

(.....なんだ、これ.....)

胸元を撫でられる感触が、妙に意識に焼きつく。

知り尽くしているはずの自分の体が、今は未知の領域のように感じられる――

そんな錯覚さえ覚えた。

くすぐったいような、けれど心臓の奥をじわりとざわつかせる感覚が、確かにそこにあった。

(.....っ)

こみ上げる熱を振り払うように、指先でズボンの生地を攣る。

だが、その拍子に――

相馬の胸筋が、大きく、波打つように跳ねた。

緊張によるものか、それとも無意識の反応か

――

それでも、艶やかに弾む肉の稜線。

静寂を破る波紋のごとく、肌の奥から空気を震

わせる。

まるで――

理性を惑わす、海妖の歌声。

その反応を、久住は見逃さなかった。

それが、合図だった。

次の瞬間——

指が、皮膚の上をゆっくりと滑り、徐々に深く沈み込む。

掌に押し返される弾力を、じつくりと受け止めながら——

さらに、指に力を込める。

(っ……)

ビクリと背筋が跳ねる。

逃げなければならないのに——

身体から、力が抜けていく。

(.....っ、違う.....違う.....！)

頭では否定するのに、身体は——

より深く、より強く、

押し潰される感触を、待ち望んでいた。

そして——

久住の手が、次の段階へと進む。

指先が、ゆっくりと円を描きながら、微かな力で撫でていく。

しかし、突然——

強く、指が沈み込む。

皮膚を押し広げるように、掌が深く沈み込み、
じつくりと揉み込んでいく。

(っ……！)

その境界は曖昧だった。

掴んでいるのか、包まれているのか——

手が胸を捉えたのか、それとも、胸が手を呑み
込んだのか。

やがて、指先と肌が溶け合うように絡み、もは
や分かちがたくなる。

奥歯を噛み、呼吸が乱れる。

胸の上下が、先ほどよりも激しくなる。

——嵐に煽られた波濤のように、荒々しく波打っていた。

高鳴る波は、嵐を求めている。……そんなはずはない。

その思考が頭をよぎった瞬間、相馬はもっと強く目を閉じた。

見なければ、感じなければ——

この墮落を、認めずに済む気がした。

(.....こんな、こと.....っ)

だが――

久住は、それすら許さなかった。

指先が、ゆっくりと、しかし確実に、最も敏感な場所へと滑っていく。

「っ.....！！！」

無意識のうちに、背筋がしなやかに引き伸ばされる。

それに伴い、隆起した胸筋が、わずかに押し出されるように持ち上がった。

気づけば――

逃げるところか、無意識のうちに胸を押しつけていた。

(.....違う.....！ そんなはずは.....！)

久住は、薄く笑うと、迷いなく指先を動かした。

硬く主張し始めた乳首を、強く摘み上げ――

わずかに指の腹で弾く。

「っ……！！」

一瞬にして電流が全身を駆け巡ったかのように

——

腰が反射的に震える。

喉が震え、熱を持った吐息がこぼれそうになる。

(やめろ……っ、こんなことで……っ)

相馬は、自分を制御しようと必死だった。

だからこそ——

久住の目の前で、声を漏らすわけにはいかな
い。

唇を噛みしめる。

だが――

それすらも、久住には読まれていた。

久住の手が――

今度は、両方の乳首を、ゆっくりと摘む。

「……っ……あ……っ」

敏感な突起を、指先が軽く擦るたびに――

喉の奥から、抑えきれない息が洩れた。

(.....くっ.....!)

その音が、耳に届いた瞬間——

相馬の顔が、じわりと赤く染まる。

自分の口から、こんな声が漏れるなんて。

こんなの——ありえない。

逃げなければならない。

そう思うのに——

羞恥が、喉の奥で絡みつき、声にならない。

なのに——久住は、さらに追い込むように。

親指と人差し指で、先端をきつく摘み上げる。

そして、じっくりと転がしながら――

強く捏ねる。

「っ……あ……ッ！！」

びくり、と腰が跳ねる。

一瞬にして、甘い痺れが全身を駆け巡る。

必死に押し殺しているのに――

乳首を摘まれるたびに、抑えきれずに全身が震えてしまう。

(……くそっ……違う……っ！)

こんなの――

ただの乳首なのに……

なぜ、こんなに……っ

腰が逃げようとするのに、指が追いかける。

もはや相馬の反応すら、計算し尽くしているか
のように。

そのとき、久住が指の力をほんの少しだけ緩め
る。

だが、それが逆に――

じわじわとした甘い疼きを生む。

まるで、じっくりと溶かされていくような。

「っ……は……っ……」

相馬は、浅い息を吐く。

なのに、胸の奥はさらに疼いて――

――もっと……

そう、求めてしまいそうになる自分に気づく。

(……っ！！)

ありえない。

そんなはずはない。

だからこそ――

「……やめろ……っ！」

必死に振り払うように叫ぶ。

だが、その声は――

媚をねだるように、震えていた。

(.....違う.....！俺は.....！)

だが、その震えた声を――

久住は聞き逃さなかった。

「.....ふ、随分素直になったな」

掠れたような声で、愉悦を滲ませる。

その言葉が――決定打だった。

羞恥と快感が頂点でぶつかり合い、全身が、一瞬、弾け飛びそうになる。

その余韻が、胸の奥を揺らした瞬間——

「っ……」

耐えきれず、相馬の目尻から一滴の涙がこぼれる。

頬を伝い、静かに首筋を滑り落ちた。

ぽたり——白衣の上に滲んだ。

——その瞬間。

久住の指が、ぴたりと止まる。

指先が、わずかに相馬の肌を押し返しながら

――

そして、ゆっくりと手を引いた。

弄ぶのに飽きたかのように。

「……っ」

相馬は、乱れていた呼吸をゆっくりと整えた。

しかし――

胸の奥にはまだ微かな震えが残っている。

身体のどこかがまだ甘い痺れを宿しているように――。

残っていた快感が消えた瞬間、ぽっかりとした虚無感が広がる。

久住の指が、涙の跡を拭う。

そのまま、顔を包み込むように頭を抱き寄せ、優しく撫でた。

「……っ」

なぜか、心臓が跳ねる。

温かい手のひらが、頬をかすめ、唇へと流れる。

触れるたび、胸の奥に広がっていたざわめきが、ゆっくりと鎮まっていく。

先ほどまでの昂ぶりが嘘のように、意識がふわりと遠のいていく。

(.....触れられることに、慣れてしまいそうだ)

そう思った瞬間――

久住の顔が、さらに近づいた。

吐息が、唇に触れる距離――

心臓が、喉元まで跳ね上がる。

だが、久住はそこで止まった。

まるで、「俺に決めさせるつもりか？」とでも
言いたげに。

喉が渇く。頭が回らない。

「……………っ」

瞼を固く閉じたまま、微動だにしなかった。

直後——久住の手が、そっと唇をなぞる。

乳首の余韻を宿した指先が、皮膚の上を柔らかく滑る。

そのまま何もせず、名残惜しげに指を離す。

かすかな温もりが残った。

そして、それはゆっくりと、肌に吸い込まれるように消えていった。

相馬の腕から、力が抜ける。

その瞬間を見届けるように、久住はようやく身体を起こした。

診療室に、静寂が落ちる。

相馬は微動だにしなかった。

力が抜けたままなのか、それとも……何かを待っているのか、自分でもわからない。

久住は、ゆっくりと立ち上がる。

何事もなかったかのように手袋を外し、指先で軽く丸めながら、静かに言った。

「今日は、ここまでにしましょう。」

白いラテックスが小さく音を立てる。

「.....歯の治療は終わった。二度と、来るな。」

淡々とした声。

それは、今までの行為をすべて無かったことにするかのように響いた。

「.....え？」

相馬は、診療台の上でわずかに身体を揺らしながら、ゆっくりと起き上がる。

久住の背中を見つめる。

何かを言わなければならない気がした。

だが、口を開こうとしても、何も言葉が出てこない。

視線を落とすと――

うっすらと自己主張を続ける胸の先端が目に入る。

不快なほど熱がこもっている。

躊躇いがちに、自分の手を伸ばす。

試すように、指で摘む。

「……っ」

途端に、久住の手の感触が鮮明に蘇る。

皮膚の奥深くに刻み込まれた記憶が、熱を帯びて疼く。

思い出したくもないのに――

思い出してしまう。

これで、本当に……終わりなのか？

